

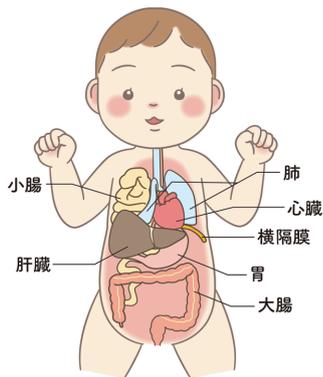


先天性横隔膜ヘルニアとは・・・

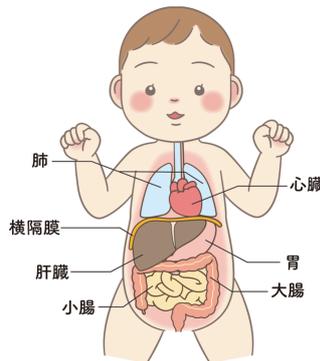


先天性横隔膜ヘルニアとは、お母さんのおなかの中で赤ちゃんのいろいろな臓器が作られていく過程で、胸とおなかを分けている横隔膜が閉じないことで、おなかの中の臓器が胸に入り込んでしまう病気です。胸の中に入り込むおなかの臓器には、小腸、結腸、肝臓、胃、十二指腸、脾臓、膵臓、腎臓などがあります。

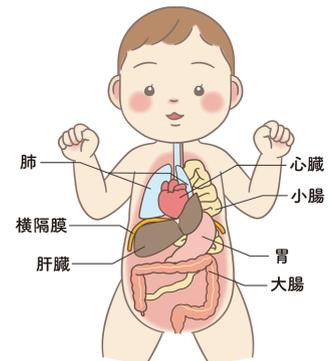
おなかの中の臓器が横隔膜の穴を通じて胸の中に入り込む時期が、肺の発育における重要な時期と一致するため、臓器による肺の圧迫によって肺が十分育たないことが一番の問題で、「肺低形成」といいます。



右横隔膜ヘルニア



正常な赤ちゃん



左横隔膜ヘルニア

横隔膜に穴がみられる側は左側が約90%で、右側は10%程度です。今のところ、原因ははっきりしていません。



先天性横隔膜ヘルニアの特徴として下記が挙げられます。

- ①胎児診断されることが多い。
- ②重症度に幅がある。

発生頻度は、2,000～5,000人に1人といわれています。日本小児外科学会による最新の調査（2018）では、年間発症数は168例と報告されています。

新生児CDHの中長期合併症・後遺症
(重篤な合併奇形や染色体異常を伴わない本症単独症例を対象)

1つ以上の中長期合併症，後遺症をもつ割合

	対象症例数 (人)	調査症例数 (人)	受診率 (%)	合併症・後遺症あり(人)	割合 (%) *
全期間	169	156		107	<u>68.6</u>
1.5歳	169	141	83.4	86	61.0
3歳	169	127	75.1	80	63.0
6歳	59	43	72.9	33	76.7

表 (伊藤美晴、他・小児外科 48(5); p509-514, 2016より引用)

半分以上の子どもに何らかの合併症があります



先天性横隔膜ヘルニア患者・家族会

詳しい情報は各SNSをご覧ください

✉ jcdh0525@gmail.com

ホームページ



Instagram



Facebook



YouTube